

『Catedral』 寸評

- ・主題を反行させたり、バス声部とカノンを繰り返したり、長大な下降線を前半と後半に置いたり、様々な工夫がみられる
- ・旋律の最高音をm.14に持つてくることで曲全体の流れに構成感を与える
- ・m.16にホ短調のドミナント-トニックのカデンツ、m.8のドミナントに半終止が感じられる
- ・全体は自由なインヴェンションというおもむき
- ・Catedral (英語だとCathedral) だけではややタイトルの意図が不明どのようなCatedralなのか形容してある方が伝わりやすい

完成度をさらに上げるために

- ・旋律的な興味を各声部で優先させる対位法でも主題の和声分析は調性感を保つためにも必須の作業
- ・バス声部は和音とその転回形のどれかにほとんど当てはまり和声外音はだいたい経過音
- ・バス声部と上声部が和声的に納得のいくカデンツを形成しているか限定進行音や和声外音はきちんと処理されているかそのような吟味も和声音楽と同様に必要
- ・結論としてまず旋律部と整合するバスの和声付けを4小節ずつくらい構成し、バス声部を主題の模倣や合いの手になるように転回形や和声外音の利用で潤色を加えていく方が対位法の研究には近道

m.1-8の参考例

The image shows a musical score for measures 1 through 8 of the piece 'Catedral'. It is written in 4/4 time with a key signature of one sharp (F#). The score is presented in two systems, each with a grand staff (treble and bass clefs). The first system covers measures 1-4, and the second system covers measures 5-8. The melody in the treble clef is characterized by eighth and quarter notes, often with rests, while the bass clef provides a harmonic accompaniment with longer note values and some chromatic movement.

m.=measure 小節番号のことです。

ぜひ研究をつけよう!
持魔勉